

# Eureka VI

六年制通信 No. 25 平成30年11月30日(金)号

## 不協和

昔、死刑囚と無期囚の心理状態の違いについて書かれた本を読んで、いたく感心した覚えがあります。死刑囚には猛烈な感受性があって、難解な本を読破したり一日に何十もの俳句を読んだり、絵を描きまくったりするそうです。ところが無期囚は感動することがない。芸術や哲学はもちろん塀の外の世界のことにも何の関心も示さなくなる。この違いは目の前に確実な死があるかどうかだという話のあと、現代人の無気力についての分析があったと記憶しています。ついでながら、この本の著者である小木貞孝教授が加賀乙彦のペンネームで名作『宣告』を書いていたこともその時に知りました。先に『宣告』を読んでいたので嬉しかったのを覚えています。

不協和という言葉を知ったのもその時だったような気がします。確か「人は、自分の態度や信念と食い違う行動をしてしまったあとでは、態度や信念の方を変えて、心の不協和を解消しようとつとめる」という文章で、社会心理学の話でしたかね、不協和という言葉が妙に印象に残っています。我が愛読の辞書「新解さん」にも「不協和音」はありますが、「不協和」という項目はありませんから、これは専門用語ということなのでしょう。

不協和とは「二つの矛盾する感覚を同時に意識した時の不快感」なのですが、人はその不快感を解消するために、自分の態度や信念、端的に言うと、言っていることが変わってくるというのですね。さっきまで言っていたことと違うではないか、そんなことが自分にも、あるいは周りの人にも起こることがありませんか。よく観察しているときつとあると思います。それはおそらく、その人が不協和を修正しているのでしょうね。分かりやすい例がイソップ寓話にあります。君たちも知っていると思いますが「すっぱい葡萄」のお話です。お腹をすかせた狐がおいしそうな葡萄を見つけます。しかし、葡萄は木の高いところに実っており、何度ジャンプしても届かない。そこで狐は「あれはどうせすっぱい葡萄に違いない」と言って立ち去る。こんな話ですが、欲しいものが手に入らない時に起こる不協和を埋めるために、欲しかったはずの物の価値を低いものと設定し直して心の均衡を保つわけですね。逆は「甘いレモン」かな。自分の所有しているレモンはたとえすっぱくても甘いと思いこもうとする傾向が私たちにはあると言われています。

私は恩師から、こんなお話を伺ったことがあります。学生運動華やかなりし頃、恩師の先輩が、何人かの学生を処分したのですね。その処分は至極まっとうなものであったようです。ところが、先輩は憤った学生たちに囲まれて処分は不当であったと自

己批判をさせられたのだそうです。暴力的な圧力に屈する形で心にもなく不当な処分であったとご自分を批判したわけですね。これは、当然ご自分の信念に反する行為なので、心に不協和が生じます。すると、それから数年後、その先生は本気であるの処分は不当だったと言うようになったのだそうです。「信念と違う行動をすると、信念を変えてしまう」例ですよ。恩師は先輩を敬愛されていたので、その変節を非常に惜しまれていました。しかし残念ながら、これもまた人間の弱さだね。

君たちはまだ若いから、自分の意に沿わない行動をとらされて不協和を感じたことは、ほとんどないかもしれません。しかし、すっぱい葡萄のようなことはあるのではないですか。例えば、勉強していて志望校に届かないことがわかってくと「志望校にしていた学校は実は酸っぱいのさ」といったことを言う人がいます。あれ、不協和の解消ですよ。本当に学びたいことがやっとわかった、それはあの学校では無理だとか何とか、表現はどうあれ、そんなことをつい口に出してしまうようです。実は私にも経験があります。しかし、本当はわかっているのです。もし、志望校へ受かる学力に達していたのなら、迷うことなく受けるに違いないことをね。狐もきつと、葡萄を手に入れていたら、甘くておいしいと言ったに決まっています。手に入れていない他の狐に自慢したかもしれません。

私は、自分の言動を内省して、不協和の解消をしているだけなのではないのか、そういう視点も持っているべきだと思います。いや、そもそも自分の信念に反する言動をしないように心掛けるべきですよ。君たちはどう思いますか。

### 今週のおすすめ

・高木彬光 『白昼の死角』 (角川文庫)

高木彬光といえば、『刺青殺人事件』から始まる名探偵神津恭介シリーズなのですが、今回は違う作品を紹介します。

本当はこれを読む前に三島由紀夫の『青の時代』を読んだ方がいいと思いますが、でもまあ知らなくても十分に楽しめると思います。夏八木勲の主演で映画化されていて、これは夏八木さんの演技が見事で面白かった。普通、原作の方がいいのですがね。ただ、映画の始めのシーンはやはり『青の時代』を知っていた方がピンとくるかな。

昔、東大生が「光クラブ」という闇金融を主宰して、当然のごとく行き詰まり、首謀者が青酸カリで自殺するという実際の事件がありました。これをもとに三島は『青の時代』を書き、高木は『白昼の死角』を書いたわけです。三島さんは「太陽カンパニー」、高木さんは「太陽クラブ」としています。

ほとんど手形詐欺の話なのですが、ピカレスク小説(悪漢小説)として十分に楽しめる作品だと思います。私は、個人的にですが、映画のエンディングに見せる夏八木さんの表情に圧倒された記憶があります。役者の凄味を感じたわけですが、今の君たちにはどう映るのかなあ。

BGMはクイーンの キラー・クイーン でした…。